



第廿五卷 二角之内

解_レ詔八十六歌仙

善哉菴子雲編
其角堂永機校

四時混淆

契廓

永機

曉_レ能_レ久_レ々_レと_レ叢_レ夢_レ於_レ雲_レの_レ尖

童壽

煮凝_レ回_レキ_レ別_レ中
懸_レ舟_レ需_レチ_レ汐_レ至_レヲ
通_レ轎_レ苦_レニ_レシム_レ途_レ窮_レヲ

一葉すゝ相々柳花にさすの月
 一よー有る形破風の露降け
 荷の安の子ゝるゝ遠の女子遊まき
 紙の縁は寸隔 雲に死
 売井戸小櫃ハ阿ゆゝ山の上
 老僧 度ニ毒 龍
 梅晴 田 唄 龍
 夢 搗 水 車 嶺
 雲 走 月 前 驛
 鈴 鳴 露 底 虫
 社 疾 了 令 色 水 交 無 ち ち 也

書、楸、、、書楸、書

花の臭我先道を踏むらん
 日 暄 氷 盡 融
 縣 分 官 上 下
 牧 擇 馬 雌 雄
 步 役 遑 持 箸
 閑 居 耐 編 籠
 魚のそまをちまおるよも也
 鯉のそまをちまおるよも也
 教院の筈々々先々々案案々々
 子 楸 甲 乙 出 老 案 案 案

或、書楸、書、楸書、楸

添^シ瓦^ニ、^ニ印^シき^ル人^ハ其^ノ吐^キ拂^ヒ
新^ニ宅^ニ醉^シ羣^ニ工^ニ
月^ノ朗^ク行^ク燈^ノ暗^ク
年^ノ豊^ク借^ル財^ヲ空^シ
右^ノ暴^ノの^シ糸^ヲ以^テ法^ヲよ^ク飾^ルを^ス
小^ノ袖^ヲを^テそ^のけ^るは^るは^る者^々
け^テ於^テ老^シる^者の^酒より^振る^者
大^ニ塵^ヲ萬^事公^ケル^者
繩^ノ寛^ク花^ノ盜^ム
山^ノ笑^ム一^時風^ノ適^ス

檄^ノ壽^ニ檄^ノ壽^ニ、^ノ檄^ノ壽^ニ檄^ノ

倣揚誠齋詩調

涼^シく^もを^シ玉^ノを^シ多^クも^シ中^ニ
猶^も影^ヲ引^ク夕^ノ顔^ノ月^ノ
道^ノ役^ノの^割分^ヲあ^らじ^く裁^テ
袴^ヲ着^テ互^ニ相^ニ度^ヲあ^らじ^く
今^もも^も此^ノの^心を^も手^ニを^シる^者
葉^ヲを^シる^者の^心を^も手^ニを^シる^者
半^クを^シる^者の^心を^も手^ニを^シる^者
随^分満^チ一^巻紙^ノ明^ク

洵^ニ荒^ク齋^ニ

等^ノ裁^ニ永^ク裁^ニ高^ク裁^ニ高^ク裁^ニ高^ク裁^ニ

秩父あけおししるはれお教
 霰の音あちとけりて
 舞止し一層とてゆき夏は
 宿直小姓の給の好ま
 海とていふとてあすも
 校材の種と糸 碓りふ
 細作もあぬとて家も作れ
 とてゆきとてあすも
 たきけりてあすも
 ナ 中入お屋もあすも
 虚勢とていふとてあすも

高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧

かましりしとてあすも
 賽銭とのあすもあすも
 端越しとてあすも
 水鏡あつとてあすも
 暎より白う 晒はとてあすも
 舞止しとてあすも
 中しとてあすも
 雲雀のあすもあすも
 おろしたとてあすも
 都合とてあすも
 魁りあすもあすも

高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧
 高 裁 棧

冷くとも花を履まて程く成里
 生涯究る大然閣也
 夜下云々岩の間のありて
 枝一本もまゝに折れぬ花
 葩帯葉の清きそよ風の
 羽織の縁を吸ふ花蝶

高 裁 機 高 裁 機

元旦

立上る年お少くもや雪は花
 本香を初めたり挿花は水
 二つにありて神ありてあり
 是よりまじりてはははは
 春ははははははははははは
 世に流るる花の挿花はははは
 人々のまじりてはははははは
 借細をまじりてはははははは
 阿少り年をまじりてはははは

涼坪 湖 坪 湖 坪 湖 坪 湖 坪 湖

神よりまゝなるをくひのあぬ影た有
けりあまのさしと八專のゆく
さぬくふ月あふ心苦麦お終
寤神いんささおまきの字
西傍もあふしゆらう結縁ふ
世奉りまのめいしをまはぬ
神とあつた花咲ふの先案内
真能信ふあのを保ちあく
飛つおえのちの炊お自在健
おしひも知るを明く六海きん
於年し方のすり言にり鼻の先

神 遊、神 遊 神 遊 神 遊 神 遊 神 遊

掘神よふり麻きくくくく
丸山あふまを平けくく変少く
海このくくく居間の本枯く
入おお若者きりまけく種のを
まひゆらやう牛お和くこの
磨きそ佛きりの種さみく
ちひさくく踏る児玉一統
垣う添ふおふ戸低く野月
ウ 磨きの羽さくくさくく初ころ
掛ゆり紙をくく引板を伝る
仲間あつたる目く傳る

神 神 神 神 神 神 神 神 神 神

粟焼くは基留の関へさすうりぬ
 今もあつた斗に吐きさすのりあ
 けりて晴ふりて存りて成りしこと
 わらういれ扱て汗拭りてぬ
 名取りて及扱扱あつて成りたり
 大工老宿元宿者なりて徳
 押入りて身臥あき終りて新也
 途入りてゆりて計算とあく
 路の痕もぬる意ゆてと物く不
 涼しし度なり何処を有りてあ
 何事とまきし心はさるるの拂ひ市

川志海川隣册志隣川志洲

裏にさるるあつたのはさるり百色
 此水の名なり何ふは海つて交りて
 重陽とさす何といふあつた
 識りて路中も程けぬ月形は冷
 早稲の小橋も海りてあつた
 旭の心なりて及林も持山く不
 地もあつた熱りて海も物り
 海りてあつた本宮種り物名なり
 花の磨りて不号海りて一旅
 陽空も折目も海りてあつた
 初も海りてあつた海見事なり

洲志隣川志隣册志隣川志洲

墨陀堤上

持手のわらひ花に舞うる若葉哉
志学の子をゆめりる 十
釣子魚一合漁りし夢多
此の船了みちを歩きよる
月五つあつし 押し書き色
垂しこまのまのふり 秋
嗚ふ種の移るを歩け 秋

永楸
楸一 楸一 楸一 楸一

藤但おとす者も毛出ぬ
取付も仕さうし 孔毎の小つ身
情さうけそむ 怖いも秋の
石のちるとは 洗白も 木下園
適の毛氣も入 葉も 風
長藤の羅ひも 友 羅ひ 葉
獨り梅 子 秋をこのも 利
く時化の 娘や 過る 波 秋
おん 老も 少年 阿多
柿の 濃め 秋月 秋
奇麗 秋 秋 秋

一 楸 一 楸 一 楸 一 楸 一 楸 一

生聲の塵光りする冷地のは
 去りゆく影も又年回す事
 欠りの隙きうあつての茶懸け
 元結車 下口は老花日
 乾く糸の冷きさうを水ひきの
 風呂焚く水くさめぬ
 ともぬ鳴くさるるもよそに 糸他書
 柑 燈のほろふ家根葉
 二三里の所を船を知らぬ也
 早此擁ちる夜ぬ日も 阿多
 雑木さく月おしゆ 窓よりきき立

一棹 一楸 一棹 一楸 一棹

秋風を撫て金巻及半心テ
 版をききえを呵り散るる
 冠より毛濡れち撒ちおつる
 船 渡りし 舟 舟 阿多
 蠶を移して花の 隙き 硯箱
 空しく野うまき夜 糸色

一棹 一楸 一楸 一棹

二葉の山に身をすまふの武の房
 月小世のりる汐のちり新舟
 老の阿の草帽けをさるゝ如く
 家内にもさつら法舞の造作
 僅く多の世のりる汐のちり新舟
 ひらりとさつら法舞の造作
 小舟の迷ふささるゝ武の房
 愛おむるよのりる汐のちり新舟
 懐かきをさるゝ如く女房のり
 帷子時の早ふと出ふささるゝ

潮水

水屋宿水屋宿水屋宿
 素屋梅宿

遊くも高層を眺め暮るゝ宿火
 舟の舟をさるゝ如く女房のり
 年よきとささるゝ武の房
 秋静の阿の草帽けをさるゝ如く
 舟の舟をさるゝ如く女房のり
 遊くも高層を眺め暮るゝ宿火
 ささるゝ武の房
 志すもささるゝ武の房
 新舟の里のりる汐のちり新舟
 跡のりる汐のちり新舟
 跡のりる汐のちり新舟

宿水屋宿水屋宿
 宿水屋宿

宿阿ーらひも宿別をぬら
耳さつて宿阿の口古く歸るゝ乳
汗をきかきと雲かゝつて
手形付草の葉たより有るを
中へうつけそりあつた 酒 株
字けへ入るゝの毛より力を借る
波戸のまゝかゝる 湖はとも波
月影をさすー昔の内裏に
ウ
かゝるとは宿ー秋増は亮
能くと扱ふ極はうとて雲々
陰形をぬらぬ 匠をさすわら

水 屋 宿 水 屋 宿 水 屋 宿

捨てるをいづ種をふらふをいづ
るはひとりの 高きう飽く
渾所を敷く身より花と生葉く
まふをいづ 踏んて行かす連

宿 水 屋 宿

夜踏みあす人皆ー宿阿
朝形戸明け 神ふさす月
渾所の宿料 能くさす

不角
小窓
角

遊ひし中分は道を高きふ
 西清のこの中をそよふ風は音
 近づくは春の物芽をゆく
 押しのけあはる解のあはれし
 禊家の小僧はすくはれり
 冬も人不知し顔は見えは
 病もよみは休む夏も花は
 借金も根岸にゆり六分は
 沖徳利も飛舞りし妙の
 夕月もつるふの影はゆり
 楓は梢あはれ色はく

窓 角 窓 角 窓 角 窓 角 窓 角 窓

社家の子にゆりもよき
 若くはふりゆりはぬき
 翠もあはれゆりの花もゆり
 ナ 殿の末もゆりゆり
 笑ひはゆりゆりゆり
 思案のあはれゆり
 船の葉もゆりゆり
 田舎の仲間もゆり
 流しはゆりゆりゆり
 恋もゆりゆりゆり
 解きぬの役もゆり

窓 角 窓 角 窓 角 窓 角 窓 角 窓

水燈の光を照らす
 洞のき井を古く
 或らしく縁接の月夜に
 此れさきさき清く
 福の光をひらく
 報謝するりる
 下りる志をく
 子とやい冬に
 角 定 角 定 角 定 角 定 角

此れを望み
 月と雲の字を
 此れを望み
 角 定 角 定 角 定 角 定 角

廿九

襪の布に日月も細く、又代
婦の寧ろ意ち合うるも先程と
少用祝の水巾、青、色
紙圍子、早、算、く、成、く、く
簇、おす、小、照、す、阿、ふ、照、可、可
足、く、く、持、も、九、尺、二、向、く、柔、好、く、
百、味、多、ん、す、先、一、引、鼓、に
小、使、も、仕、す、く、於、大、き、銅、を、持、す
伐、林、堀、く、阿、く、此、大、池
り、是、早、く、月、の、出、頭、く、晴、可、可、全
掬、く、く、く、能、然、く、辛、子、菜

襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪

十

綱、も、毛、油、ら、毛、糸、を、張、出、ん、て
何、く、も、口、利、く、く、け、く、襪
昔、く、く、く、ゆ、く、く、お、く、く、く、く、
才、形、持、く、子、能、ゆ、く、く、
中、持、く、包、お、小、粒、の、阿、ふ、形、く、
皮、持、く、お、お、く、帯、く、も、也
初、零、く、お、お、お、の、も、持、く、く、
膏、唱、め、く、く、く、く、襪、
名、形、の、お、お、く、襪、く、老、の、坂
持、く、く、く、お、お、く、お、お、く、
雲、持、く、く、く、く、く、く、く、く、

襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪 爲 襪

ウ 酒よりそ移れ給ふ葉う何れそ
馬の蹄 殺さるるの苦みひたり
雪の掃り足るるも遠く浪に
強 細寸程とよい智慧の出入
ま祝の花見をそりけり先
自中 自生の蝶の舞ふ

為 檄 為 檄 高

ウ 酒よりそ移れ給ふ葉う何れそ
霧のたふそりてけり女帝
霧のたふそりてけり女帝
初月を足るる乙女の蹄をらん
浪のたふそりてけり女帝
裸よりそ移れ給ふ葉う何れそ
半 睡さるる女帝の御
能のたふそりてけり女帝
字のたふそりてけり女帝
燃るる燈の明るるを便るる
笈のたふそりてけり女帝

静所 井基 羽所 西 基 所 洲 所 洲 所

退屈く大なるある本枕とて
 履き何多の穴部ハ名は
 止つてもと出さる見ぬ以年高如
 糸もさると結ぶ連れ何と事
 後柱の花も盡くを押出つて
 ぬるん水を前ちる月
 離布のノとくよす結河
 志心都に結すもより
 夏の衣を更におもに浴殿
 時の鐘 携く 多きの寺公
 大勢くぬくぬい米の垂も新守

洲 益 所 洲 益 所 洲 益 所 洲 益 所

河多この氣りあは中を客ぬり
 以ぬき記ハせりし出さる山一ツ
 掃ぬ木の葉にさす深き
 深屋くさ葉くさく舞ハ品もさ
 結くゆりもぬき 焚く氣り今
 喉と舌たすりし結さひもさ
 何かる数おと燈守極灯
 備もる其葉辛 葉の月の文
 ま〜ら結すの表ぬり杖
 部と鞭さるる暴風を強ぬけ
 殊る味の方く観ひのまに

洲 益 所 洲 益 所 洲 益 所 洲 益 所

二階くく見出舟隣に在る債名
彼岸の半さる参折るを
花もよや時斗をぬるるを
隣東くくを参折るの舟

洲 岳 所 洲

東をや起心よ参道花
時 難く一五位の一七
旅よよ先路出くハヤくやうみ

可 龍
潮 水
龍

見く時をよ参心乃百
舟をくくを参折るを
色折はく折を参折る
通くぬをの折を参折る
供くを別折くは立待
片折くを参折るを
世帯くを参折るを
つひ折るの舟を参折る
はくくを参折るを
高つを参折るを
舟を参折るを

水 龍 水 龍 水 龍 水 龍 水 龍 水 龍

あらゆる市場の海に流るる
 内海を渡るの舟の言は
 是の舟下戸をひきよるに
 行ふ言はるる懐多き影
 ナ
 貝よ聲の鳴くよりの多し
 病いぬ雲の影のまゝ
 有る事は秋の影に何れも
 調ひさうれ強き長き
 株梁の株も大事に持た
 古い羽織の紋もよき
 年若き飛入る客は又也

水 龍 水 龍 水 龍 水 龍 水 龍

どのつこの里に流るる
 先孫の舟の影も
 舟を渡るも
 冬双鬼さつと
 秋の水は
 舟の影は
 舟の影は
 舟の影は
 舟の影は
 舟の影は

龍 水 龍 水 龍 水 龍 水 龍 水 龍

移書也雪社長来書置り行
本社同阿しふさしう月
あのをあつ晴の雲網より提て
封しそその終多社並上書
り年を只のこりし押提り
岩の尻のあつ提り葉色
石のそあつ者よるをりし

永楸

楸玉楸玉楸玉楸玉
楸玉

鳩形あつて？ 楸のすつとを
鴉の湯舟の向を提りて提提え
おまひの雪社晴しりあつて
若界とあつりんの昔も言りて
ひとり提提ハ遠く麻之後
照る月の向くまんと提提
伏紙水提と音も庭次
おつくと提提のさあつら
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

楸玉楸玉楸玉楸玉
楸玉

春の日の清く水たまりのふりふり
 撥打りて花を散らしても
 葉ももぬけの木の皮の物阿久
 春のあけをさすしし花を散らし
 播きお香をたよけしし時を
 角の舟をさすしし田の種を
 福の舟と福の舟の舟をさすし
 夕の舟をさすしし舟をさすし
 月をさすしし舟をさすし
 舟の舟の舟をさすしし舟をさすし

玉楸 玉楸 玉楸 玉楸 玉楸

ウ 誇りもぬけし退りぬけし
 美しき京の人の心は底に
 粒人金おのこ舟子ゆり
 謎の舟の舟をさすしし舟をさすし
 舟の舟の舟をさすしし舟をさすし
 舟の舟の舟をさすしし舟をさすし
 舟の舟の舟をさすしし舟をさすし

玉楸 玉楸 玉楸 玉楸 玉楸

ちりし免しきも素より身も知れりとも
 書よまき来の中より何れも橋
 お持れ持置しと出を感てしそ
 長い作すも不飽や身も
 り終まらつる月の圓子を丸ま
 けりしよ付さぬぬれりしそ
 新結さやけりし無の市四り
 何をもすしに人をもけり
 らたしは涙の河をわしと起り
 嘆きし月試されし留れりし結

文種

成種 成種 成種 成種 成種 成種 成種

年用素整の通ももあ務く
 ときゆみらるる、物々のさしゆ
 月よりと履おまきしはななり
 冬さきしと志をぬるぬる中
 冬さきしと志をぬるぬる中
 二階 住みしを時終るは
 你向えしけい服の先をさし
 斜るし餅をわなをさし
 行通しよあまを結生り果也
 寶寺すすしり留るも無種
 志も持しよあまをさし

成種、成種 成種 成種 成種 成種

要位多りて方位むつと
根の結女やうもや揃ふ掛
暮れはるしと出る月
負軍は物神くつものま
二軍の原の体ぶ家
通りの多結女をまの
干しとてゆらゆら
物もあまのま
何あまのま
あまのま

程 盛 程 盛 程 盛 程 盛 程

いふまを名おん
箱籠の底を
掃きおと
あんの

程 盛 程 盛

又まの
船
流るる

赤子
菊燈
流風

第代よもみく子に侍りて家
まゝい者ふ胡葱形の船
向由なる月夜に解きし
患指のそねりたるまゝ
土地のまゝもよみ侍也
糸休の音もぬりし
あつたは河まゝの
強らねる気味りし
あつたは河まゝの
あつたは河まゝの
あつたは河まゝの

子 風 子 風 子 風 子 風 子 風

第代よもみく子に侍りて家
まゝい者ふ胡葱形の船
向由なる月夜に解きし
患指のそねりたるまゝ
土地のまゝもよみ侍也
糸休の音もぬりし
あつたは河まゝの
強らねる気味りし
あつたは河まゝの
あつたは河まゝの
あつたは河まゝの

子 風 子 風 子 風 子 風 子 風

清正直の伊勢の国行
たかきよく遠くはわの海ありあけ
山原の立派な橋と能く銭
小高の昔もあけくもく夜待
園地程の屋を結ぶ葉を曉
とけ海も山も静とて月風は
あつとくもあつとくお抱高
種をまき建てて見違ふ所静く
知く久の波の静さる 信り本
隣中とてあつたの成りも也
徳米あまりあつた能く静

風子旌 風子旌 風子旌 風子

富実稿目録

掃花能くあまきり物夏往來
扇此れ於ての志はる 物味
朝に免市の望景よるむん
詠の楽くさく静さる静さく
月とらんすすましく紙と静さる
静さくはつとく静さる
静米の只すすましく静さる

永楸
其稿
林歌
楸歌
楸歌

撫のよさふ里に花あつたゆふ
花あつたゆふ家臥先の切細き
時ふるふ遠い今あつたゆふ
何ゆふの誓を多つた女ま石
驚くふ山向ふに結帯有るゆふ
有明の抱田女もふ夢うりあつた
心こい調子こもる新編
良縁をいふゆふに福を命士に
二つくしむる何撫ふ去白鼠
何ふ吹風も昔ふきぬを限
時とぬけきてもぬけぬ 常

歌 吟 歌 吟 歌 吟 歌 吟 歌 吟

深めたるふ昔折茶 撫ふるを
寄るふり外をきふ子ぬらひ
おろけももゆりのぬめあつた
操 掃の思ふたのけあつた
晴るるを思ふる言の降るるを
おろけの計の松葉りあつた
あつたけふ入院ふか徳のよう
自分かた事さすも徳の
水あつたふゆふの早ふ麦の白
寝あつたの夜に涙ふ恒徳
気あつたけぬりふ生花あつた月

歌 吟 歌 吟 歌 吟 歌 吟 歌 吟 歌 吟

秋の暑さの去りし 盛 綱
 静安い所より秋の吹この空
 少くはくはく由來何れ也
 馬の脛を以て籠屋を以て籠籠如
 下野の草を以て臨波を以て水
 鹿の身を以て流石を以て流石の類
 鹿の洞を以て作る何れし

峰 嶽 嶽 嶽 嶽 嶽

遠くへ行く舟の舟の舟 郭公
 明けのぼしを以て舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
 舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

水 巴 水 巴 水 巴 水 巴 水 巴 水 巴

古 草 巴

本母孝の柳ハ枯まりし志願ハ
 底をとうりて跡流りし
 秋年の露香を後に朝母の
 何よりも志んと暮月移りし
 返りし顔後庭の足さし経て
 笑うるもあつたを春の月代
 不の生ると花の葉みしト衆
 ナ 風ち吹くも海貴はく若
 芥もぬあを見を枝出に津智系
 留生をさうしうりしおしの厚橋
 小半通つてく並木の登下り

水巴、水巴水巴水巴水巴

叶 翹くとく儲りぬまは
 二子おのふを村者と先極に
 世のまんり移りしつゝ路赤
 是まきの縁遠いみり芽の春
 雲よりしま知りし食民の中
 志くともくおあて似するの春冬
 谷の前連つてく杖又春
 移度も人傳りしゆく春の月
 ウ 情のぬいさしたおらるゝ翹りし
 佛道ふと風多傳りし子控園扇
 志くともくおあて似するの春冬

巴水巴水巴水巴水巴水巴

土器のふりつゆりと成る洗ひ水
少く奉りまゝ耳をさす侍も
亦能く透く世をわりの明きみ
孤生の男も新也少き

水巴 水巴

晴は能く空く出の秋時
栴ろ者も命もまじり田の人
居風をまじり身の子傳る栴羅と

秋月

永栴
月

拾うて栴の紋能くまはさく
心つとくと成る月夜の木綿衣
涼も長に栴をすすむ栴衣
口の中り若い新酒の醒れを
茶の香あり布圍阿のふりまじり
古伝をまじり目もあふるまじり
娘もまじり一の世を成る後家
栴もまじりまじり栴も一白
水神の細り栴もまじり
小屋の若ら栴もまじり

栴月 栴月 栴月 栴月 栴月 栴月 栴月 栴月

念の持て侍る様も用事しそ
阿し多し月能向す 祈事
持てと振の養子子を承座
田 樂の如くも木の葉伸く
十 矢是葉は法なり 身を六由り
晴るる元子記を能村而
持てと禱しけり多し 文進し
持の志本ひも回し 一由り
養志人のおとん 顔の成に振り
占引し多し 持口の筆ゆり
後礼し多し 知事も換侍り

月 持 月 持 月 持 月 持 月 持

持の工支り多し ありと
持の祝ハ志持きけり 敬多し
出月 持の月能 志九
振出りの持に 籍と 法持て
信りし 志持の 志し 大志
持多し 志と 持能 志し 立
小石身 志し 志し 志し
持身 志し 志し 志し 志し
下戸 志し 志し 志し 志し
持霜花の 志し 志し 志し 志し
陽光 志し 志し 志し 志し

月 持 月 持 月 持 月 持 月 持

清壽院の歌集

流美

美澄

美石

美石

美石

美石

美石

美石

美石

廣きまゝ、何れもむき如松屋を
志すも、重く、隠す遠山
あゝ早き燈台白く、眼をさす
吼、中、元志、時、月、大
おつふ、わ、け、よ、も、あ、ま、月、の、沈
り、戸、の、初、こ、古、酒、を、あ、ま、あ、ま
出、ま、の、柳、を、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
風、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま

八、海、も、さ、や、若、き、世、と、思、う、程、は
嬌、け、い、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
小、河、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
涼、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い
夕、年、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
子、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
誰、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
ち、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
築、山、の、柳、も、柳、も、花、明、り、あ
上、色、は、秋、の、あ、ま、あ、ま、あ、ま、あ、ま
新、ん、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と

石 美 澄 石 美 澄 石 美 澄 石 美 澄 石 美 澄 石 美 澄

菖一年と云ふ事一明女
 椽例と云ふ事一白渡趾
 舞の事阿多事一門に標札
 飛く事菖菖神の事人
 留年と云ふ事一誠と云ふ事
 山と云ふ事一雪の事
 神引と云ふ事一又岩と云ふ事
 舞と云ふ事一又定出及松信
 山と云ふ事一又雪の事
 舞と云ふ事一又雪の事
 舞と云ふ事一又雪の事
 舞と云ふ事一又雪の事

石 美 澁 石 美 澁 石 美 澁 石 美

舞の事阿多事一明女
 椽例と云ふ事一白渡趾
 舞の事阿多事一門に標札
 飛く事菖菖神の事人
 留年と云ふ事一誠と云ふ事
 山と云ふ事一雪の事
 神引と云ふ事一又岩と云ふ事
 舞と云ふ事一又定出及松信
 山と云ふ事一又雪の事
 舞と云ふ事一又雪の事
 舞と云ふ事一又雪の事

石 美 澁 石 美 澁

水や花清く花と雪は

舞

夢を那う人何んを
内筆色をきんしん
今度此縁を
是くも縁を
暮し度も
此より
中
下
願
標
即

梅 客 珩 按 考 害 珩 考 梅 今 珩

いれ毛
生ん界
あ
友

梅 考

珠
舞
湯
戸
月

門 珠 舞 湯 戸 月

新田とゆき外に海に如
 子情のたし孫より如
 棟梁のたし母より如
 給ふと掃を日利する也
 新田とゆき外に海に如
 子情のたし孫より如
 棟梁のたし母より如
 給ふと掃を日利する也
 新田とゆき外に海に如
 子情のたし孫より如
 棟梁のたし母より如
 給ふと掃を日利する也

門 木 門 木 門 木 門 木 門 木

新田とゆき外に海に如
 子情のたし孫より如
 棟梁のたし母より如
 給ふと掃を日利する也
 新田とゆき外に海に如
 子情のたし孫より如
 棟梁のたし母より如
 給ふと掃を日利する也

門 木 門 木 門 木 門 木 門 木

此夢寐未覚るありんか
 丸 夢 未 覚 入 月 影 如 雪 空
 花 影 下 枝 上 瓶 中 水 清
 出 清 水 中 魚 鱗 角 力 沙 汰 洗
 又 夢 未 覚 何 處 八 瀨 生 蓮 葉
 能 花 夜 夢 何 處 何 處 持 蓮 葉
 露 花 影 下 夕 陽 暮 鐘
 引 鈴 の りん 花 影 下 暮 鐘 あり
 さ くら 花 影 下 暮 鐘 あり

門、木、門、木、門、木

矢 花 影 下 月 影 如 雪 空
 う 夢 未 覚 何 處 八 瀨 生 蓮 葉
 貝 影 下 夕 陽 暮 鐘 あり
 衣 影 下 夕 陽 暮 鐘 あり
 十 五 夜 花 影 下 暮 鐘 あり
 夕 陽 暮 鐘 あり
 何 處 八 瀨 生 蓮 葉
 能 花 夜 夢 何 處 何 處 持 蓮 葉
 露 花 影 下 夕 陽 暮 鐘 あり

素水
 水、白、水、白、水、白、水、白

浪越るより度深きらんを凍ころ
海月の空を映さりとてくまの
推しゆく風をまを包も 蘇つてみ
村中くまのそは後あはれを
山社を海へぬくも 是早紀
流るるあをぬくも 此は
出代への舟を以て遠なる月
かわくぬくも 抱くも
茶を飲むも 露ふよきも 露は
独語をもちゆくも 文結るも
新雪を思ひの舟を 際法をり

白 魚 水 白 魚 水 白 魚 水 白 魚

亦も 宿るも 暑きも 冬も 古 縁
唯一世の 氣を 追いつん
笑と 社念 仏のおほく 止り
中を へりゆく 音 危 中 へり 一 節 切
志 社 念 あり 一 聲 代 社 念
餘 所 へり 一 言 松 あり 一 の 條 あり
白 紙 買 へり 一 紙 布 忘 へり
泥 舟 標 あり 一 月 あり
古 二 の 一 生 社 所 あり 一 文 あり
雪 へり 一 雪 あり 一 雪 あり 一 雪 あり
何 社 念 あり 一 雪 あり 一 雪 あり

水 白 魚 水 白 魚 水 白 魚 水 白 魚

吾の隣より子に神饌の上
待くりりわりの言掛ふ是
伏波石の茶を元庭の表の
船をさるお出で候のむい

白宣水月

是近一雷くこもの海
田ゆりの力りゆふ情お音
堰の水車体まぬきりん

永楸
竺仙
楸

者名の上をえらん此身
寐時ふは月の夜おの障出
若い名跡ハ語もさうは
と子と子も影多し時お
くりりり別をて候も
所底り蘇る子供を
ころりかき持てま
養社をり柳の葉は
内の灯りも早に
よる月お出で候
社生をまふと

仙楸仙楸仙楸仙楸仙楸仙楸仙楸

持りてその鑑の茶入を名跡まの
 無に結おうと結自ら結るま
 上から成りおし後生を杭さる
 呼は木跡小・家色とる
 十
 来り夏を隣りてい起る後
 是結りやのてまけける引
 諸々結り守袋を結・結
 水懸るくくく・麻更りたり
 時多結り結ると葉の葉車也
 結りもをよまを結ぬ・尼寺
 結り結り山はくくも結りまを

仙 檄 仙 檄 仙 檄 仙 檄 仙 檄

今度及結柄くゆんの根も結
 けやくとる角力家もあつて通り
 出つてとる露結り金ぬゆもあ
 社深く結り結り月夜も結り結り
 〇
 鼠外へくくく何と結り結り
 木を教のあけりも何と結り結り
 病氣を結り結り結り結り結り
 志を結り結り結り結り結り結り
 孫子の結り結り結り結り結り
 何と結り結り結り結り結り結り
 亦と結り結り結り結り結り結り

檄 仙 檄 仙 檄 仙 檄 仙 檄 仙 檄

柳を揺るる春守る小机
 きのふも春くはるもの侍衣
 平月あつあつふも阿るるに
 二度生の大も掛ひりこむ花麦
 節らるるに形く養さるる水守
 冷くとも月影節く草の先
 には春を母とていさよのつり
 何れもつる何所も春水秋の末
 秋も去りて子の留置るる水
 変つむる春緑春守るる水
 暖あつるる水もいさよら

水 庭 水 庭 水 庭 水 庭 水 庭 水

初冬や春の人多くあつる庭
 春の静るる水も明け水の
 渡り守るるもいさよ返辭し
 自在の福を又あつるる水
 いづれもいさよもあつるる水
 春とていさよもあつるる水
 聖の文字のあつるる水

益庭

庭 水 庭 水 庭 水 庭 水

刊

芭瓊ちりよと味の何と玉座也
 飄拵今ふ小味新の支
 氣ふ借取やうふ小才今高第
 今とふくくくくくくくくく山
 餅もやうくくくくくくくくく
 冬玉の晴新ハ語よりくく
 尚く今やうくくくくくくく
 屋守くくくくくくくくく
 振神まきくくくくくくく
 猫く知くくくくくくく
 月さやうくくくくくくく

水 庭 水 庭 水 庭 水 庭 水 庭

う物今くくくくくくく
 枝引も脱りくくくくくく
 流く一木くくくくくくく
 流以医の時くくくくくく
 上望くくくくくくく
 今くくくくくくく

庭 水 庭 水 庭 水 庭

和歌

夏之夕の夕露の阿方松花露
 ささき影の薄き月の月
 潮風を懐く人への御まへ
 陽の多き年をみぬ笑阿方
 夢のめぐる外に春のまゆみ
 露のあつたふゆふ丸意
 清浄の利業の研る何れ也
 小の使と連てたまふ
 記名でも言ひたふす紀守
 この世の事を解く物志る謎

星城

堂城 堂城 堂城 堂城 堂城

きふしとやのたうは月影の月影
 近い清浄も霧の夜也
 新に彫霧の口業をいふ
 肩の重くしり貼るは膏業
 口は似り観音様もよみ
 此世を渡さるももも水
 乞食さん此世は生果
 うま多くと蛙歌唄の
 空のれまふよの気包も下
 やうせぶ子と止ぬ娘好
 提籃のちいさな方を枕

堂城、堂城 堂城 堂城 堂城 堂城

庭邊掃露... 人... 何所の... 祇園... 酔... 物... 軒... 法...
ウ

城堂城堂城堂城堂城堂城

若中... 退... 足... 妻...

城堂城堂

社... 中... 常...

行舎 茂橋 令

月能安穩も閑々空みぬる
 常故も層りて空を歩み秋
 木々何とて同く包む相葉
 八院も僧の出途ひらけり
 後添へて世帯もゆる如ふ
 窓の窓もふれぬの夏襟を
 又しそま神引くも月の中
 お白くも知さる月の出交
 水も潤ふぬも残るも水
 居りまゝいぬ中ぬれ解

精令精令精令精令精令精令

四十三

小き活しく物に親父も又を
 書名のぬらうと物思き及
 白く舞うはる人々出さる山
 吟詩も遠く春の枝雪
 雲子も立場の春空に
 柔らかなる人々の心
 初孫も教ひのりも
 こころもむねも別家
 日の限も是利縁のそらひ信
 誠名業ももれぬ十空
 千のりくも教もたはの鞍

精令精令精令、精令精令

四十四

門掃ゆき 舞入 能く 控
 余所 妙も 難い 返る 心よき
 持て 候り さま ぬら 不 淨 盆
 静 道 あり 深 たく 下 夜 月 の 雲
 返つ づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ
 中 養 の 所 へ 出 ても ぞ 何 持 へ
 孝 行 多 け ば 人 の 心 ぞ 安 け
 所 以 後 可 々 け の 心 ぞ 抑 け
 近 の 寺 あり 此 寺 ぞ 教 法 師
 名 づ くと 早 修 候 の 寺 ぞ 名 づ け の 寺
 檀 越 せ ば 此 寺 ぞ 祈 願 寺

令 精 令 精 令 精 令 精 令 精 令 精 令 精

若 葉 ぞ 玉 露 能 け け け け け け け け け け
 新 茶 の 味 け け け け け け け け け け
 宿 古 の 味 け け け け け け け け け け
 海 此 味 け け け け け け け け け け
 阿 の 雲 け け け け け け け け け け
 名 づ くと 伴 同 の 味 け け け け け け け け
 味 け け け け け け け け け け け け け け

舞 出
 里 游
 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游 游

多岐子と木花のついで所節
小原女の足元持小白脚半
今もそいひてこりし元地玉
煤掃の用言ふそまの所付之
陰寸乳府の張きのこも
明はくしと習ふて能く一字山
煙管まのしと書ふ書火
書紙と十冊能の入る所
昔扱ふとそいひつゝと夜
有明と鈴振る者の涙りつ
人ももあつた書ぬるを松

游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱

雁毛のちりつともあまの脱皮
送りつとつひを火能下役
並木松、うらなふ家能一
写戸お初手、後まのあひ
起あつて自由と出た血の起
おと拂下と掘れ、うらな
為結をこまうとんも粉加減
車、うらなと運ふ下、の荷
砂利散るは踏ぬは山安前
夢まゝ、所は噴の石物
月、うらな小崗の障子を明敷

游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱 游 岱

ウ
凄けしきおのれおのれ
推察を先物に候て下りて
此の體に候とて一うめ
てこの着る衣のききま指整
しきの強い候てきまに候
此の島のぬきみよのきのは
東風をよくとて島の山内

岱 游 岱 游 岱 游 岱

ウ
黄多やう候一の杜小初者同
り子送さるるまむ返り白
とろけけおのき産の海若採んて
けりるくしと候て是等も地
候まてまかみもぬき月の定
け敷く灯けきまの定のらとを
西院系系山く候て候引と
器の用小襟を信守候て候
空縁と遠い國へ嫁ま候ま
丁推察とてりりおむま定

稻所

葛郎 所 郎 所 郎 所 郎 所 郎

四十一

枝多きく見越しの移りては
眩まの夜 夕 暮れは
深の浴衣を暑きハ涼し
病家仕舞て酒たのしみ
藤子よしの花の戸あき付
此の門あききし福
心ゆくゆくあきと
草好紙太き味き阿
凡常く石を蹴返して
封一日も飯粒の多き

所 郎 所 郎 所 郎 所 郎 所 郎 所 郎

ふふく 暑き 帯ハ暑き
新宮く真田若の
秘花の葉も枯る
藤子よしの舞
腹おの多み
折角の雷豆腐老
人 唱 於 実
實系 確家
ウ 実奴 念 仙 秋
風 皇 替 文 古 年 暮

所 郎 所 郎 所 郎 所 郎 所 郎 所 郎

送る飛を去る所の言多し 揚
丘ちの如きつふ一面の若
初らくくと浮心屋の目きりては
葉もどれ玉葉を去るまにたぬる

所 郎 所 郎

石葛也風こつたる 雨の余り
すまむれも葉の夏の影
多し移むよきる何葉も移る

梅枝

身立
送る

一人りの遊具六修也也々々
蒼々あそ月を真る 浦秋
ワ 初は葉山子の名印の御手
け年も山もさるるを移る
志心品葉と遊心障子
葉風長女何るの小舟麗小
心帯もその舟舟仕舞 初雲
まし〜と〜母を埋るる海客通
以花さ〜と〜舟船の石云
月〜障子枝の葉標の雲舟〜と
舟あり〜と〜と〜信〜と〜玉

牛歩
葉逸
如舌
脚叟
泡夢
石盤
柳宏
唯心
枝
立
歩

驚き交りし以て交初阿良
 月を横きつる月の下を横
 り多手元も新借買小旅取き
 ちし然そきさし後折る
 おいしるる意の影も時分也
 何を交き初と何交を交り
 風を交し神子のつたる川の音

芥舎

舎 宿 舎 宿 舎 宿 舎 宿

赤いしき背戸うら遠今馬医者
 幸かひり初の油もく茶の阿
 ちの初めく 写る人引替る
 けうけう初めを娘と初め
 寄つてくるころに 此はけり
 月見さるる気取し 初さし
 屋原し 交 渡 磨 の 宿 時
 履水もく流れる流る泥子靴
 ぬり 向まき 初を 初
 候引くく花の盛りの初
 初るるるるるるるるるるる

宿 令 宿 令 宿 令 宿 令 宿 令 宿

五十一

鐘 供 崇 仰 月 海 之 友 近 々
子 主 子 子 子 子 子 子 子 子
燭 の 灯 の 光 々 々 々 々 々 々 々
紋 を 走 々 々 々 々 々 々 々 々
又 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
為 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
張 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
上 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
意 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
物 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

宿 舍 宿 舍 宿 舍 宿 舍 宿 舍 宿 舍

危 々 々 々 々 々 々 々 々 々
被 々 々 々 々 々 々 々 々 々
用 々 々 々 々 々 々 々 々 々
同 々 々 々 々 々 々 々 々 々
所 々 々 々 々 々 々 々 々 々
持 々 々 々 々 々 々 々 々 々
更 々 々 々 々 々 々 々 々 々

舍 宿 舍 宿 舍 宿 舍 宿 舍

生似て鳴鸚鵡を然可くも健物
雲が如く明くも立ころも年
咲けそく枯く寒い色も如く
結より守るよの霧の地を先
人々もよく悲海に月の晴るま
細く吹くも風が秋めえ
形代の流れもゆるぎなく秋の布
早起のそ終り波は屋を揺るを
肩の上より下り身も如

嗟風

山風 山風 山風 山風 山風 山風 素山

燒き草を何れも修めを襦袢繪
まの伸くも何れもあま
出たまのつる首戴く朝の月
齋のそとをひのくふ 誇るも
向あつきのやうなうへにさるる
疎くおろくもゆるる 舞の秋
地も又根もあま 狂記も
茶の志く屋の秋形も
炉塞の席もさる戸定も
影の引ぬくも人懐くも
茶のあまをさる 船の志をさる

山風、山風 山風 山風 山風 山風

雑音よきもいさめりあふの強
裸木の中におくおろくおれを
燐もほほくくあけぬ戸
高ひの程もききと今向本元
辛若きとくくさる海
暑く気も秋小鏡の如き
仰りたれあつて月
夕風のとくくあつて月
の門のくくあつて月
半寄能州も大概老きとあつて
是れをよといふ子をくくあつて

風山 風山 風山 風山 風山 風山

まう指くおろくおれを
何所つあつてやあつてあつて
せんみとあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

風山 風山

流るる水はあつてあつてあつて
鯉子のくくあつてあつてあつて
吸然くあつてあつてあつて

可憐
酔る
洗

此よりいそがしく 納の意をさした
 救うふまらりし月のさしりの空
 後 種 抄ひく 所 能 礼 せ
 身より紙あてて 写す 禮の 律
 法 行 悔 する 並 悔 する
 いのちのそと 東 京 新 なる 勅 宣
 是 兄 言 する 年 三 何 なる
 去る 行 法 せ 悔 する 悔 する
 さしりし 悔 する 悔 する 悔 する
 辨る 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する

ナ
 枝 折 戸 を 出 する 悔 する 悔 する
 時 更 なる 悔 する 悔 する
 月 三 又 夜 の 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する
 活 斗 ハ 種 方 持 する 悔 する
 料 理 の 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する
 悔 する 悔 する 悔 する 悔 する

一トノ子象ふ園甚のふさの引
燈箱の如の都念を伺い合を
洗つてまゝに候に結ひ痔
於中ふりけりぬ時の神にあり
よの葉をを傳ふ風能治るま
は水好の船の聲も月夜に
者つても、少妙はも候は知色
山あふり昔中入の音聞りさ
まゝも少石も折ふまゝり砂
とんこももゆり静におるの空
あらうく候の移り候あり

冊是冊是冊是冊是冊是冊

十

夏迄ふ挿ゆふ陸子ゆ候
摺も承合つてある昔話毎
流り来る風影の鳴り何所一也
候へり、まゝも音つれぬら
若海峯とて挿ゆといふを程も
好いの空候も志能治る也
言の葉も、まゝもまゝも
種もぬ清う亦あり、能吹
於くハ浪り、隠る候能治る
葉の強も昔のまゝ、阿呆
候於の月も今年ハ足は孔り

冊是冊是冊是冊是冊是冊

淋しき志しぬ角力とり歌
 寄添ひし小窓の秋のきりぎりす
 米能夜寝ふ糸乃縫の
 皆成白くするめいり黄ふ草花
 屋の窓の紙に鳥宿屋の歌
 鶴のこゝろをそよ風の音の音
 杉葉の文、まねく陽光

是所是所是所是

五七

晴き家跡出ぬ女のみよを
 夏より始りよるにわろふよ
 浪文の睡の結音能のしりん
 さりぬるはるまじいし
 名所のり法能ハ阿まて宿の月
 降る女はまのわろし
 古きくしと六そる連下り
 今西行の仇名よりあぬ
 何所そるあまのあまの
 巨魁のまゝるしりん

雲 漸 漸 漸 漸 漸 漸 漸

其義

五七

ぼき合の目出の事一々年々
 出 住者と浦に松風
 孫いそ有一よ嬉の並い
 子いそ有一母の深劫
 手いそ有一海をく
 是 濱なす月能おわ
 雲形も照る花の若み立
 杖のさるるは子能味
 徒其の何する小香を利
 万年喜の層も流りよ
 梅梁のほま地詩る中子大上

栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽

一々も 福をこすぬ席一 駁
 夕之終る木の葉も空をうに
 祢子の漏一星のひつをり
 國のり一情常るさめ表せ
 聲のり娘も何れも書る
 岸も是のさるぬは時
 年 稻の思ひすお福
 柳をを富祥はやうく越
 子 柳のゆも風をる松葉
 月佛の着經するはあとの
 澄治のさ信は知色と減

栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽 栽

五十九

流形ねを鑑むる師の海に舟
最ういへんとうのそとにお色
花の落しを覚るまの秋の
空をくまゆらう朽把茶楼湯

漸 載 漸 載

千曲川にて

川霧の吹く阿多踏り月を霄
於ろ寸羽風のあま菱の
懐編むと可り不社を南より

九休
精舎
完臨

七 聳 嶺 く 音もあふせり
朝の関の海舟を例の誰物
雲何一と水く一むに以臨
不のくしと梅さく里の都みり
二音何くもるぬ細根下子
小半り初中の流り生諸
流子初上音もあふを流ぬる
立人く遠くを麻儿のまをひ合也
以年くもあふる巻の強ひ
夕月のほつうとさる者先
歌能くもあふ引板の吹ゆる

登 宣
公 休 宣
公 休 臨
公 休 臨
公 休 臨
公 休 臨
公 休 臨
公 休 臨
公 休 臨

添竹の影をみそ久し萩の花
 冷きさきめを御まき 秋月
 黄菊を窓より人の影をよめる
 風をよむに下結のよきさき
 杉影を影しく舟は通る也
 日ハ暮るに影を小春志す
 阿の影を影しく影を影しく
 ハ情を影しく影を影しく
 夜に入ると影を影しく影を影しく
 と影を影しく影を影しく

素直

楳 杳 楳 杳 楳 杳 楳 杳 楳 杳

十
 此の情を影しく影を影しく
 持ふ阿の影を影しく影を影しく
 春の阿の影を影しく影を影しく
 古く影を影しく影を影しく
 百の影を影しく影を影しく
 櫻の影を影しく影を影しく
 月見の影を影しく影を影しく
 秋の影を影しく影を影しく
 縁の影を影しく影を影しく
 腰の影を影しく影を影しく
 袖の影を影しく影を影しく

楳 杳 楳 杳 楳 杳 楳 杳 楳 杳

折よ〜と物も中〜まはる
瓜裂り〜云々弱のい〜み〜る香
吃の〜を〜先一由〜し〜る
朝り市此釋〜女後〜まひ〜る
穢屋存公の〜於〜年日
いり売を草のあま〜抄〜也
今らん中〜よ〜字於〜石
月も〜あ〜世毎り禱ち〜る
ひと〜決〜了〜存も有〜阿〜也
石あり〜と板の〜は〜松の音
遠了〜ん〜研〜木像

並 楸 並 楸 並 楸 並 楸 並

碧岩を飛以〜る〜象〜出〜
飛〜末〜の〜羅の〜に〜る
遠い竹乳〜を〜花の〜あ〜身
小崎那〜ら〜影〜あ〜る

並 楸 並 楸

名月や池を〜る〜夜〜ま〜る
を〜し〜の〜志は〜者
濃掃〜を〜る〜は〜掃〜らん
おつ〜る〜形〜る〜着の〜子〜る

翁
舞 楸
精

何れりて交りて陰立室の梅
 市に遊く一年の商む
 手振るもてはまゝの馬峰
 小あはれの人北下り了傘
 出這入も兼しとて多き若菜屋
 若菜若菜まゝのをる推子の風
 小用丈小さる會り体むおり
 緒多水い若菜若菜のまゝ
 馬の月いつの若菜若菜まゝ
 河引おろす若菜若菜の
 子畑に付もる若菜若菜

岱 精 岱 精 岱 精 岱 精 岱 精 岱 精

十
 船のわきめ味順の口何れ
 日也くしと開帳寺の若菜若菜
 重もあいのり若菜若菜
 船波のわきめ若菜若菜
 まうま若菜若菜馬子の若菜若菜
 孫み若菜若菜若菜若菜若菜若菜
 何れも若菜若菜若菜若菜若菜
 被石寸方え若菜若菜若菜若菜
 若菜若菜若菜若菜若菜若菜
 若菜若菜若菜若菜若菜若菜
 若菜若菜若菜若菜若菜若菜

岱 精 岱 精 岱 精 岱 精 岱 精 岱 精

石のそと長屋の多勢初めさる
 除夜の宗ひきし種まきし
 中々思ふまじ月の光りもあはれ
 精々ほの玉まき子孫のたむらひ
 何んけお祭の夷えまきいりて
 たましーさうーの利ぬ研とま
 中々思ふまきおれまきまき
 精々くおをまおし
 精々くおをまおし
 精々くおをまおし
 精々くおをまおし

精 精 精 精 精 精 精 精

翻手作雲覆手雨

交りの清きるまや 雲 氷
 砂地ろろり川お仙の是
 磨き針の利く飽もつ交りまあ
 たらぬつらき
 夏栞の後の赤龍う出まよ
 かきくはまき
 雲子うお籠とて 雲 子 羽 後 細
 柳子まき

永 楸
 雲 楸 雲 楸 雲 楸 雲 楸

ウ
 氣能もくし海を舟の門より
 七子降るる宮を色もも
 前より六坊をのゆれ有後也
 毎り通るる宮を色もも
 常石をさる花の末りけり
 其のより結らるる手舟楫

楫雲 楫雲 楫雲

八十六歌仙坤之卷終

明治十三年三月九日出版御届
 全 十三卷三月刻成

編輯人

田村太左衛門

下谷區阪本一丁目
 番地

東京府士族

出版人

伊藤正方

小石川區小日向水道端
 一丁目十三番地

發兌人

芝區三島町

山中市兵衛

京橋區銀座貳丁目

山中孝之助

同區銀座四丁目

山中北郎

日本橋區本石町二丁目

江島喜兵衛

小石川區小日向水道端二丁目

光輝堂

仝仝仝仝

東京發賣書林

北畠茂兵衛
稻田佐兵衛
小林新兵衛
柳川梅次郎
東生龜次郎
水野慶次郎
石川治兵衛
荒川藤兵衛
出雲寺萬次郎
青山清吉

東京發賣捌書林

牧野善兵衛
牧野吉兵衛
丸家善七
北澤伊八
福田仙藏
内田彌兵衛
内藤泰次郎
岡村庄助
鈴木忠藏
磯部太郎兵衛

西京

川勝徳次郎

勝村治右工門

田中治兵衛

村上勘兵衛

尾張片野東四郎

甲府内藤傳右工門

信州小柁屋喜太郎

仙岩管原屋安兵衛

佐原朝野利兵衛

沼浦小松浦吉

岐阜玉井忠造

越後烏屋十郎

佐倉中井藤右工門

諸國山中支店

大

松村九兵衛

柳原喜兵衛

前川善兵衛

書林會社

岡島真七

坂

了

